

---

# 呟き喫茶店

葦原那岐沙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眩き喫茶店

### 【Nコード】

N7947K

### 【作者名】

葦原那岐沙

### 【あらすじ】

とある所に存在する、一軒の喫茶店。

その店長は、いつものように愛用の椅子に座り、一人でブツブツと呟く日々を送っていた。

そんなある日……

(前書き)

最近見つけた喫茶店を題材に「こんな喫茶店あったらいいな」「って妄想しながら書いた短編小説です。

とある国の、そのまたとある町、その一角に一軒の喫茶店がある。

あたしがこの店を構えてから、もう十数年経っただろうか。

あたしは見慣れた店内をゆったりと見渡す。

こじやれた店を意識して、内装をあたしなりに思考・アレンジして物や器具を配置したのに、あたしの店は一向に若者からは縁遠い店のままだ。

少し暗めの照明で店内にゆったり感を漂わせ、あたしが大好きなジャズ調の曲を有線放送で永遠に流し、喫茶店のあの独特のリラックスした雰囲気、さらなる相乗効果を乗せる。

若者の客層狙いならポップな曲や、流行りの歌手の曲を流すのが主流かもしれないが、あたしはあたし独自のやり方で若者客を集めてみたかった。他人から見たらただ意固地になっているだけ、とも言えるが。

まあ言うまでもなく、失敗する事は目に見えていた。

若者が通うには地味とも言える店内に、好きなようにおしゃべりして談笑するには、喫茶店は静かすぎて、逆に声をあげて笑う事も出来ない。

図書館の空気と喫茶店の空気は似ている。と、あたしはつくづく思う。

建物自体が独特の空気を作り上げ、決して大声を出したり騒いだりしてはいけないとゆうルールが自然に出来上がる。特に厳しい処罰があるわけではないが、人はみなその暗黙のルールに従い、静かに静かにと行動する。

必然的に、騒ぐに騒げない喫茶店には若者は近づかず、年層の高いお客さんがしか来ない。

それが喫茶店。

現に、今だってカウンターには中年の男性が一人、奥のテーブルにはお年を召した奥様方が静かに談笑している。

「本当。なにやってんだか、あたしはさ」

カウンターの内側にある愛用の椅子に座りながら、私はいつものように一人で呟く。

開店当時から置いてあるこの椅子は、いわばあたしの相棒。一日の

ほとんどをこの椅子の上で過ごし、毎日のようにあたしはこの椅子の上で一人呟やいている。

「店長さん。今日も一人でしゃべってんのかい？」

目の前のカウンターに座っている、一人の中年の男性が声をかけてきた。

この男性とはそれなりに付き合いがあるので、別段深く考えず答える。

「ええ、そうよ？ 私の仕事はね、お客様に珈琲を淹れる事と、この椅子の上でブツブツ呟く事なんです」

「はは、そうかい。なら邪魔しちやいけないな」

そうやって中年の男性は、いつものように自分で持ってきていた本を取り出し読み始めた。

そしてあたしも仕事に戻る。

椅子に深くもたれ掛かり、黒いマグカップを手に取り、自分で淹れた珈琲を味わって飲み干す。

高校を卒業してからだろうか、本格的に夢を実現させようと考えたのは。

夢は昔から変わらず、喫茶店のマスター。最初はアルバイトから始め、いつか自分の店を持ち、立派に経営する事が最終目標だった。

現在のあたしはこの店のマスター。女性の場合はギャルソンだったかしら？ この店も一人で経営している。店員がいないのはあたしが雇わないからであって、決して人件費削減とかではない。

しかし、厳密に言つとこの店は元々あたしのじゃない。若い頃ここでアルバイトをし、そのまま正式に雇ってもらい、元マスターが老いで働けなくなったのを機に、あたしにこの店を託してくれたのだ。

あの時のあたしは本当に幸せだっただろう、結果的に数年で夢の自分のお店を持ち、憧れのマスターになる事が出来たのだから。

数年で夢が叶ってしまったあたしは、次なる目標を探した。

しかし、すぐに夢が叶ってしまったせいも、まだまだ若かったあたしにはしばらく次の目標を見いだせない毎日が続いた。

そんなある日。コンビニで、たまたま目に入った雑誌のとある記事を見たのがきっかけだった。

『近年、国内の喫茶店の数が減少の一途を歩んでいる』

この文章にあたしは心を打たれた。

その記事の内容を要約すると。喫茶店に対する、若者たちの関心は年を重ねるにつれ減少し、一部の団塊層でしか客足がなく、増える事の無いお客に最近の国の不況も相まって、已む無く店をたたむお店が急増している、との事だった。

確かに現代には喫茶店よりも、もっと若者向けのお店がある。お茶がしたいなら、おしゃれなカフェテラスなどに若者たちは傾向を示さず、暗くて地味、年寄りしかいないような古臭いイメージが強い喫茶店に、若者たちが喰いつくわけがない。

だからあたしは決心したのだ。

このお店を、いや。全ての喫茶店を、この危惧した状況から救おうと。

それは自分の店を持つ以上の、比喩物にもならない至極の夢だった。

まずは第一歩として、己の店から変えてみせると決心したのだが、十数年も経った今でも若者のお客は一向に増えない。

「がー。こつ、カウンターの前でマスターと常連の若い女の子とかが楽しく会話する風景。いつかは叶うと信じ、それを期待してここまでやってきたが、今目の前にいるのは一人のおジサンか・・・」

そのオジサンは、私の呟きが聞えていないのか、それとも私の仕事の邪魔をしないよう無視しているのか、本の読む手を止めない。

時々、本当に稀だが若い子たちもこの店に訪れることはある。

このお店目的、ではなく。行く場所が無い、たまたま目に入ったから、興味本位、その程度の理由で数人来店する事がある。

見るからに本大好きの地味系女子高生や、今風のイケイケな格好した集団、何の騒ぎか分からないが汗だくで来た子もいたっけな。

「最後に来た若い子って、何カ月前だったかなあ」

また一言、あたしは誰に言ったのではなく呟く。

その時。

カランカラン。

店の扉にくっついていて、来店者を知らせるためのベルが鳴った。

「いらっしやい」

あたしは来店者に仕事上の挨拶をする。

見た所まだ中学生か、見た目が幼いだけの高校生か、何ともどつちつかずの女の子が入ってきた。

その子は扉から近い、周りに誰も居ない四人席の所に腰を下ろした。あたしは愛用の椅子から立ち上がり、キッチンへ向かい、そこで透明のコップに水を注ぐ。

そのままカウンターを出て、その子の席まで水を持っていく。

あたしの足音に気が付き、女の子の表情が若干変わる。

「いらっしやい、注文が決まったら呼んでくれ」

「あ……珈琲……を一つ……」

どうやら注文が最初から決まっていたのか、勢いで言ってしまったのかわからないが、すぐに注文が決まった。

「珈琲ね。アイスかホット、どっちだい？」

「えっと……ホット……を」

もごもごと、非常に聞き取りづらい声で女の子は喋る。注文を聞き逃しそうになるため、あたしは耳に神経を集中させる。

「なら、ミルクと砂糖は？」

「両方……下さい……」

「分かった。ちょっと待っておくれ」

何とかあたしは注文を聞き終え、再びキッチンへと向かう。

ふむ、随分と暗い子だったな。いや、ただの人見知りってやつか？  
まあ、何にせよ今は珈琲だな。

あたし独自にブレンドして珈琲豆を焙煎機にかけ、あたし独自で身につけたスピードでゆったりと煎っていく。

しかし、久々だなー若い子が来たのは。あんなオジサンなんかよ  
り、カウンターの席に来てもらって、色々と話したい所なんだがな  
あ……あの調子じゃそうもいかねえかー。

そうこう考えているうちに、何十年も同じ作業をして完全に覚えた  
のか、手が勝手に動いて珈琲淹れのお湯を注ぐ所まで進行していた。  
つとつとつと。よし完成だ。

お湯を注ぎ終え、いい香りが鼻を通り過ぎていく。

あたしはこの瞬間が好きだ。何十年経とうと、まったく飽きがこな  
い至高のひと時。

あたしは黒い漆が塗ってあるお盆に、出来たての珈琲が入った白い  
カップと、ミルクが入っている小さな容器、その隣に角砂糖が数個  
入っている透明の容器を乗せて、あの女の子の席に向かう。

席まで向かうと、あの子があたしの存在に気が付き、少し変な顔に

なる。

「はい、おまちどうぞさん」

何故あたしの顔を見た途端表情を変えたのかいささか疑問だが、あたしは個人的な笑顔を向けながら持つてきた物を机に置く。

「あ……どうも……」

軽く会釈され、あたしも笑顔で軽く返してカウンターへと戻った。

いつもの愛用の椅子へと座り、深くもたれ掛かる。

あの女の子、あたしの事怖がつてんのかなあ。あたしが近づくと、やたら表情変えるしなー。まだ何にもしてねえのになあ。どーしたもんかねえ……ただでさえ若い子たちからは人気ないのにさあ。

「あゝあ、なんだかなあ」

ちょっとしたモヤモヤと一緒に、あたしはまた一人呟く。

「あ……あの……」

蚊の泣くような小さな声が聞えた。声がした方を向くと、今のあたしの悩みの種の子が、いつの間にかカウンターに来ていた。

「ん、どうした？ 何かほしいのか？」

「いや……その」

もはや慣れてしまったもじもじ具合に、あたしは特に気にせず、相手の答えを待つ。

「ここって……アルバイトの募集とか……してたりとか」

意を決して出てきた言葉に、あたしは内心少し驚いた。

「あー……アルバイトねえ。公に募集はしてないけどなあ」

その言葉を聞いて、今度は相手が驚いたのか、ガツクリと肩を落とし明らかに落胆したのが見て分かった。

「そう……ですか……」

今にも泣きそうな表情を浮かべ、さらに暗くなってしまった。もはや真黒だ。

「あんだ、ここで働きたいのかい？」

見るに堪えず、あたしはもう少しこの話を広げてみる。

「え……あ、はい……」

「ふーん、あんだ珍しいね？ それともアンティーク好きとかか？  
確かにこの店の調度品は古いもんが」

「い、いえ……そうじゃなくて……」

女の子は不意に私の言葉をさえぎり、今までにない積極的な姿勢を

見せた。

そうじゃない？ とゆうと、じゃ〜お小遣い目当てとかか？ つつてもあんまりいい賃金出してくれるような店に見えないよな〜ここ。自分でゆうのもなんだがな。

「あたし、喫茶店が．．．好きで．．．．．珈琲とかも．．．．．淹れてみたいんです．．．」

．．．．．へえ、中々素晴らしい志望理由じゃん。

「なるほどね。率直に言っちゃうと、あなたのその気持ちを尊重して、雇ってやってもいい」

「．．．え．．．」

真っ暗だった女の子の顔が、徐々にぱーと花が咲くように明るく開いていく。

「ただし」

と、あたしは付けくわえ。

「給料はハッキリ言って、あんまり高望するんじゃないぞ。あと、もちよっとくらい明るく頼みたいな」

「あ．．．．．はい．．．」

「あーかーるーく」

「は、はい……」

あたしはシニカルに笑みをこぼして、女の子も初めてその柔らかい笑みを見せてくれた。

オジサンは一瞬本から目をそらし、そんなあたし達の光景を横目で見て、薄く笑いながら再び本に視線を戻した。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

『後日談』

数カ月後。

「あ、いらっしやませー」

元気すぎず、大きすぎず、喫茶店の雰囲気壊さない程度の声でお客さんに挨拶する。

早速今来たお客さんに、人数分のお水を持っていく。

どうやら注文はすぐ決まっていたようで、その場で注文を受ける。

すぐさまキッチンへ行き、注文された物を作る。

注文を受けたのは、ホット珈琲一杯。

店長さんがブレンドした珈琲豆を焙煎機にかけ、私なりの独自のスピードで回す。

本当なら店長さんがコーヒーを淹れるものなんだが、今は買い物に行ってしまう、不在なのだ。

現在店内には、カウンターのところに中年の男性が一人、店内の奥に数人のご婦人、そして今来たキャリアウーマンのような人が一人いる。

店員は私しかおらず、必然的に一人で全てをこなさなきゃいけない。

店長さんが買い物に行ってしまう、内心ドキドキしっぱなしで大変だ。だが、逆に考えると私に店の留守を任してくれたとゆう事は、それなりに信頼されている証拠だ。

これはすごくうれしい事だ。少なくとも、数ヶ月前前での自分からは、とても想像できない進歩だ。

そうこう考えている内に、コーヒーが淹れ終わった。

とても芳醇なよい香りが立ち昇り、私の鼻を刺激する。

私はこの瞬間が、何よりも好きだ。

私は黒い漆が塗ってあるお盆に、出来たての珈琲が入った白いカッ

ブと、ミルクが入っている小さな容器、その隣に角砂糖が数個入っている透明の容器を乗せて、注文客の元へ向かう。

無事コーヒーを渡し終え、安堵のため息を心でつき、カウンターへと戻る。

カウンターの中には、店長さんが愛用している大きな椅子があり。

その隣には、まだ新しいちょっと小さめの白い椅子がある。

私は、そのちょっと小さな白い椅子に深く座り、そこで緊張の糸がすっと解けた。

「はあー、緊張するなあ」

「いやいや、案外様似になってるよ？ お譲ちゃん」

急に話しかけられ、私はびくっと体を前のめりにした。

声の主はカウンターに座っている、一人の中年の男性だった。

「特にコーヒーを淹れる時とかうきうきした顔で、あの店長さんの若い頃思い出すよ」

わははは、と笑い声を静かに上げながら中年の男性は言った。

この男性、私がこの店でアルバイトした日から今の今日まで、必ず店に訪れていつものカウンターの席に着いている。

もはやあの席は、あの人の年間シートのような所になっている。

「おじ様は店長さんと仲がいいんですか？」

「うーん、僕は良好だとは思っよ？　ただ、あの店長さんはあんまり僕の話に付き合ってくれないからな。いつつもその椅子に座って、一人で呟いてばっかだね」

ここ数カ月、手とり足とり色々と指導してもらい、私の対人恐怖症もそこそこマシになったと思う。

私の対人恐怖症は昔からの持病で、現在接客業をこなせているのは、あの気さくな店長さんの性格のおかげだ。

けど、店長さんはあんまりお客さんとも話さず、いつも愛用の椅子でブツブツ一人で呟いている。店長さんとお客さんが話す光景と見ると、たまにこのおじさんが一方的に話しかけていると何を何度か見たくらいだ。今では大半の仕事を私が肩代わりしているので、店長さんはコーヒーを淹れる時くらいしか席を立たない。

「店長さんって、昔もあの椅子で独り言を言ってたんですか？」

「そうだねえ・・・僕がここに通いだして何年経つか分からないけど、最初に来た時から店長さん、今と同じように呟いてたね」

少し懐かしむように、おじさんは表情を緩めた。

「そう、なんですか」

「うん。まあ、僕はあの呟きを聞きにこの店に来てるって感じかな？」

「え？」

「何だろうね、僕には妻も娘もいるけど、何でかあの店長さんの眩きをずっと聞いてたいのさ。魅せられた、いや、惚れちゃったのかな？」

「惚れちゃった……」

私が言葉を復唱すると、慌てておじさんは。

「おととととと、この事は妻には内緒だよ？ 店長さんにもね」

少し茶化すようにおじさんは言う。

「あはは、分かってますよ」

自然と笑みがこぼれ、つられておじさんも笑った。

そのまま数秒間沈黙が続き、その間ジャズ調の曲が耳に入ってくる。

すると、突然。

「眩き喫茶店」

「へ？」

「この店の愛称さ。もっとも、僕が命名して僕しか使ってないけどね」

「眩き、喫茶店」

私は静かに、その言葉を飲み込む。

「素敵な名前だと思います、とっても」

「そうかい？ はは、気にいっていただけで光栄だよ」

「私もその名前使ってもいいですか？」

「ああ、いいともいいとも」

話はここで終わり、おじさんは持ってきていた本を読み始め、私は再び椅子に深くもたれかかった。

眩き喫茶店、か。

何度もその言葉を心の中で眩き、私はゆっくりと知らぬ間に目を閉じる。

自然と気持ちは、暖かな木漏れ日の中にいるような気分になり。私の心は、いつの間にか深い深い底へとゆっくり静かに落ちていく。

「お会計お願いします………あら？」

「ん？ おやおや。見習い店長さん、寝ちゃったようだね」

「仕方ありませんね。ここに代金をおいときますか」

「いいのかい？ 起こさなくて」

「いえ、あんな寝顔をされたらとても、ねえ」

「ははは、確かにね。起きたら僕から伝えておくよ、美人のお姉さんがお金おいといたよ、って」

「ふふ、どうもありがとうございます。では」

カランカラン。

お客の入店と退出を知らせる鐘が響く。

店内は若者受けしないジャズ調の曲が流れ、ゆったりとした時間が永遠にも流れる。

カランカラン。

「おーい、戻ったぞー……………おーい……………おーい……………って、おいおい」

「お、戻ったね。お帰り、店長さん」

「ただいま。んで？ 何でこうなってんだ？」

「君の帰りが遅いからさ。きつと一人で緊張した反動だろうね。よくなったとはいえ、この子はまだまだ対人には慣れてないだろうしね」

「あたしのせいかな？」

「……珈琲……淹れ……なきや……むにゃ」

「おいおい……今度は寝言をブツブツ呟きだしたぞ」

「ふ……あっはっはっは」

「な、なんだよいきなり」

「いやいや、誰かにとても似ていたもんでね。あっはっは、この子も将来有望だよ」

「??？」

「どうやら僕は、死ぬまでこの店に来たくなかったよ。あっはっは」

「んあ？ どーゆーこっちゃ？」

「呟き……喫茶店……むにゃ」

ジャズ調の曲に、一人の寝言の呟きが交わる。

ゆったりと、静かに。

この先も。

ずっと、ずっと、ずっと。

永遠に。

(後書き)

何かコメント、良かった点、悪かった点、一言感想を下さると物凄くうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7947k/>

---

咳き喫茶店

2010年10月11日11時56分発行